

メトロポリタン史学会

第 6 回秋季シンポジウムのお知らせ

現代に生きる私たちにとって、国家は切っても切り離せない関係にあります。とはいえ、それは自明な存在ではなく、改めて「国家とは何か」と問われれば、その問いに答えることはなかなか容易ではないのも事実です。メトロポリタン史学会では、秋季シンポジウム「古代東アジアの国家形成」を企画し、国家形成期に焦点を当ててこの疑問について議論したいと思います。

日本列島から朝鮮半島にまたがる地域の国家形成において、圧倒的に高度な文明を誇った中国王朝の影響を否定することはできません。また、社会のいかなる段階を国家とみなすかについては多様な視点と方法論による接近が可能です。本シンポジウムは、今回、地域的には中国、朝鮮、日本を含む東アジアという範囲を設定し、文献と考古学という異なる角度から、各地域における国家形成の様相に接近することを目的としています。会員のみなさんの参加をお待ちしております。

「古代東アジアの国家形成」

日 時 2010年11月20日(土) 午後1時～午後6時
会 場 首都大学東京(東京都立大学) 本部棟大会議室
京王相模原線 南大沢駅下車 徒歩5分

【報 告】13:00～16:25

報告1. 川口勝康氏(首都大学東京)

「国家形成の指標と日本古代史における画期」

報告2. 澤田秀実氏(くらしき作陽大学)

「古代国家形成期における前方後円墳秩序の役割」

報告3. 早乙女雅博氏(東京大学)

「考古学から見た新羅の国家形成」

報告4. 小嶋茂稔氏(東京学芸大学)

「中国古代国家形成史研究の成果と課題」

【全体討論】16:30～18:00

【懇親会】18:30～20:00

メトロポリタン史学会第六回総会・大会報告

本年4月17日(土)に、首都大学東京(東京都立大学)大会議室において、メトロポリタン史学会の第六回総会・大会が開催されました。参加者は総会13名・大会52名でした。

午前10時30分、小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり、2009年度活動報告、決算報告、監査報告、2010年度活動方針案・予算案・委員候補者が順次提案され、それぞれ採択されました(後掲議案書参照)。議論ではこれまでの活動を振り返りながら、研究活動や会誌・報告集発行等について活発な討論が行われ、具体的な提案もいくつか出されました。今後の活動に活かしたいと思います。

午後は、「20世紀の戦争 その世界史的位相」をテーマにシンポジウムが開かれました。内容は以下の通りです。なお報告は、報告集として有志舎より刊行される予定ですので、ご期待下さい。

木畑 洋一氏(成城大学)

「帝国の総力戦」としての第一次世界大戦」

小野寺拓也氏(共立女子大学)

「エイジェンシー(行為主体性)と「被害と加害の重層性」

第二次大戦末期のドイツ国防軍兵士の野戦郵便から」

加藤 陽子氏(東京大学)

「太平洋戦争を「かたち」から考える」

山田 朗氏(明治大学)

「現代戦争の特徴と自衛隊の兵器体系」

[コメンテーター]

油井大三郎氏(東京女子大学)

佐々木隆爾氏(東京都立大学名誉教授)

メトロポリタン史学会第6回総会議案書(2010.4.17)

[メトロポリタン史学会 2009年度活動報告]

2009.4~2010.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第5号を2009年12月に刊行し、史学科のある大学を中心に約80機関に寄贈した。
2. メトロポリタン史学叢書2『いま社会主義を考える 歴史からの眼差し』(桜井書店)を2010年3月に刊行した。
3. 第5回総会・大会を2009年4月18日(土)に開催し(参加者31名)、第6回総会・大会(2010年4月17日)の準備を行った。
4. 第4回歴史探訪「軍艦三笠と猿島海軍要塞跡」を2009年10月11日(日)に実施した。参加者19名、講師:野内秀明氏、山田昌久氏
5. 第5回秋季シンポジウム「ダーウィン・進化論と歴史学」を、2009年11月28日(土)に実施した。参加者27名
6. 会報8号(2009.11.20)、会報9号(2010.3.20)を発行した。
7. 会員数は現状維持にとどまり、拡大目標(165名)を達成できなかった。

[メトロポリタン史学会 2010年度活動方針案]

2010.4~2011.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第6号を2010年12月に刊行する。
2. 第6回秋のシンポジウムを2010年11月20日(土)に行う。
3. 第3回秋季シンポジウム『地域世界論の新地平』, 第4回秋季シンポジウム『歴史は誰のものなのか』, 第5回秋季シンポジウム『ダーウィン・進化論と歴史学』の各報告を会誌『メトロポリタン史学』に特集として順次掲載する。
4. 第6回大会シンポジウム「20世紀の戦争 その世界史的位相」の報告集を有志舎より刊行する。
5. 第5回歴史探訪を10月10日に実施する。
6. 第7回総会・大会(2011年4月23日)の準備を行う。
7. 165名を目標に会員拡大に努め, 会財政の確立を図る。
8. 必要に応じて委員の補充を行う。

[メトロポリタン史学会 2009年度委員名簿]

任期: 2009.4~2011.3

会 長: 佐々木隆爾

副 会 長: 峰岸純夫, 増谷英樹, 青木哲夫, 小谷汪之

事 務 局: 木村 誠(事務局長), 谷口 央, 赤羽目匡由, 白川耕一(補充), 前田弘毅(補充)

編 集: 河原 温(責任者), 奥村 哲, 佐々木真, 澤田秀実, 月脚達彦, 福田千鶴, 出穂雅実

企画・研究: 中野隆生(責任者), 小野 昭, 角田三佳, 川合 康, 趙 景達, 橋谷 弘, 林田伸一

監 事: 義江明子, 山田昌久

メトロポリタン史学会 2009年度決算報告

2009.4~2010.3

収入

			2009予算	2009決算
前年度繰越金			690,430	690,430
会費			719,000	696,000
	2005年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	0 0 10,000
	2006年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	0 0 10,000
	2007年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	5,000 0 23,000
	2008年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	20,000 0 103,000
	2009年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	139,000 5,000 330,000
	2010年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	0 0 35,000
	2011~13年度	(現金) (銀行) (郵便振替)	— — —	0 0 16,000
雑収入			0	39,477
	会誌売り上げ		—	2,000
	叢書売り上げ		—	37,400
	銀行口座利息		—	77
計			1,409,430	1,425,907

[支出]

		2009予算	2009決算
会誌制作費		900,000	682,380
郵便料金		175,800	127,583
	会誌発送	85,800	62,143
	大会案内・会報等発送	80,000	34,230
	葉書	10,000	30,000
	切手	—	0
	その他	—	1,210
事務用品代		20,000	2,774
賃金・旅費		50,000	65,000
雑費		20,000	23,406
	振込手数料	—	840
	弁当・お茶・紙コップ	—	3,394
	懇親会赤字補填	—	18,072
	印字サービス料	—	1,100
予備費		243,630	0
次年度繰越金		—	524,764
	現金	—	94,945
	銀行	—	141,469
	郵便振替	—	288,350
計		1,409,430	1,425,907

●会員数 154名 (一般 144名 学生・院生 10名)

●会費納入率 09年度・103/154=66.9% 08年度・118/149=79.9% 07年度・125/148=84.5%

メトロポリタン史学会 2010年度予算

2010.4.1~2011.3.31

[収入] 1,483,764

前年度繰越金		524,764
会費		739,000
	一般会員	5,000 × 120 = 600,000
	学生・院生	3,000 × 12 = 36,000
	未収分	5,000 × 20 = 100,000
		3,000 × 1 = 3,000
叢書販売		2,200 × 100 = 220,000
合計		1,483,764

* 予定会員数：165名 (一般 150, 学生・院生 15)

[支出] 1,483,764

会誌制作費		500,000
叢書購入費		550,000
郵便料金		140,400
	会誌郵送	180 × 220 = 39,600
	大会案内・会報等発送	50,000
	叢書郵送	340 × 120 = 40,800
	葉書・切手	10,000
事務用品代		20,000
賃金・旅費		50,000
雑費		20,000
予備費		203,364
計		1,483,764

【シンポジウム参加記】

メトロポリタン史学会第六回大会シンポジウム参加記

青木 哲夫 (本会副会長)

「20世紀の戦争 その世界史的位相」と題された大会シンポジウムは2010年4月17日、東京都立大学で開催された。まず、次の四つの報告が行われた。

木畑洋一氏 「「帝国の総力戦」としての第一次世界大戦」

木畑氏はホブズボームの「短い20世紀」論に対比させて、帝国主義世界体制の成立から崩壊までの「長い

20 世紀」論を提唱され、二つの世界大戦の位置を「長い 20 世紀」の変容をもたらしたものと位置付けられた。特に、第一次世界大戦後の帝国主義体制の再編制が第二次世界大戦の複合的性格をもたらす要因であるとし、「帝国の総力戦」としての第一次大戦を植民地における動向のなかで捉える、いくつかの論点を出された。

まず、植民地再分割戦争であった第一次大戦が、アフリカやアジアで戦われたことを示され、とりわけ、ドイツ領東アフリカでの戦争が以前の植民地獲得戦争と継続した性格をもっているとされた。次いで、兵士や労働者として戦争に動員されたアジア・アフリカの植民地民衆の実相を、英・仏・独・露のそれぞれについて示され、また、動員された民衆の意識の多様さ(戦争参加への誇り、戦争の悲惨、自治・独立への意識など)を取り上げられた。そして、戦争後の各植民地における不満や反乱といった帝国の「ゆらぎ」が述べられ、最後に「帝国の総力戦」であった一次大戦の結果が、脱植民地化過程の端緒を開いたと締め括られた。

大きい視野と具体的な論点とによる報告で学ぶものが多かった。

小野寺拓也氏「エイジェンシー(行為主体)と『被害と加害の重層性』

第二次世界大戦末期のドイツ国防軍兵士の野戦郵便から

小野寺氏の報告は第二次世界大戦末期におけるドイツ兵 22 人の書簡 3667 通を分析したものである。そこでの問題意識は「20 世紀の戦争における強制と自発性、動員と自己動員という二つのベクトルの相補性」にあるとされ、また書簡そのものを読み解くという方法をとられている。一般民衆の戦争への関わりを何か一つの要素で割り切ることにはできないし、また、書簡(特に軍事郵便)の持つ限界性(検閲、強がり、抑制など)はあるとしても、まずは文面どおりに受け取る必要があるから、こうした報告の意識と方法は共感できた。

小野寺氏の分析と論点は多岐にわたっており、それぞれに多様で、しかも移ろいやすく、また時には相互に矛盾する面をもって示された。

小野寺氏は最後に、「被害と加害の重層性」をあげられる。強いられている軍隊生活という意識が、敵愾心に転化し、暴力性を帯びてくること、その自覚と自らへ跳ね返ることへの恐怖が指摘される。そして、この「被害と加害の重層性」の問題は現在の人間にとっても問うべき大きな問題であるとされる。

加藤陽子氏「太平洋戦争を「かたち」から考える」

加藤氏は、20 世紀の戦争における「軍」と「民」の関係をめぐる問題を取り上げた。軍人と文官の区別の問題について、東京裁判判事レーリンクの見解や日中戦争下での経済官僚の動向や意図(特に北支那開発・中支那振興会社に関して)にふれて、侵略戦争遂行の責任を軍(軍人)に負わせることの、原理として、また事実としての問題を述べ、そうした視点から、「太平洋戦争敗戦にともなう、戦時から平時への転換期の、軍と民」に論及された。

報告で中心的に述べられたのは敗戦後における軍保有資材・物資の取扱、その不正な放出・横流しの問題である。先例として、第一次大戦での山東鉄道の取扱をめぐって、法制官僚による日本取得を当然とする議論があったことを指摘された。次いで、敗戦後の軍物資不正事件の横行について、これが議会などで「終戦犯罪」ともいわれるようなものであったにもかかわらず、8月14日の閣議決定が放出の端緒であり、その後も官庁や民間への放出が政策として続いていたことを明らかにされた。そして、強制連行されていた朝鮮人・中国人労務者の帰還に際して、日本企業に補償金が支払われたことも同様の問題として指摘された。

敗戦後の軍物資問題については、隠退蔵物資問題・同摘発運動としてしか関心をもっていなかったもので、興味深かった。

山田朗氏「現代戦争の特徴と自衛隊の兵器体系 デタント期からイラク戦争期を中心に

山田氏は、アメリカの戦略と自衛隊の兵器体系を中心にして、そこから現代戦争の特徴を探ろうとされた。まず、デタント期(1970年代)は、その名に反して実際には、米ソによる海洋核戦力の軍拡競争が行われた時代であったことを、空母・原潜・SLBMの就役・配備状況から示される。そして、このデタント期に「ソ

連海軍の脅威」を理由とした日米軍事一体化が始まったとされる。旧ガイドライン（1978）の策定や有事法制研究の動きもその一端であったという。この動きは80年代の「米ソ新冷戦」期に拡大していった。

そして、「新冷戦」後ないし湾岸戦争後に、自衛隊軍事力の変質が、米軍の新たな世界展開に対応して始まり、その兵器体系の変貌が生じたと指摘された。中心となるのはイージス艦に見られる遠征・情報収集能力の強化と大型艦船の就役による長距離輸送・補給力の向上であり、また弾道ミサイル(BMD)防衛構想の導入であり、こうした自衛隊の兵器体系の急速な変貌が、地球規模の軍拡の連鎖の一つの起点になっているとされる。

豊富な資料と明快な論点提示によって、多くの知見をえることができた。

四報告の後、油井大三郎氏と佐々木隆爾氏からのコメントがあった。

油井氏は、20世紀の戦争のとらえ方の問題、「長い20世紀」への批判としての「短い20世紀」という視点、第一次大戦の被害の受け止め方の差などの比較研究の必要性、主体性をめぐる日独の差の問題、冷戦後の変化は何か、なぜ第三次世界大戦はおこらなかったか、なぜアメリカが戦争を起すか、といった論点を提示された。

メトロポリタン史学会会長である佐々木氏は、「世界大戦に対する警告を発した人たち ベンジャミン・ブリテンとウィルフレッド・オウエン」として、大規模空襲被災地であるコベントリーの大聖堂の献堂式に際しての戦争レクイエムの作曲とそれにつかわれたオウエンの詩について紹介され、この警告はどれほど浸透し、活かされたか、と問いかけられた。

以上の報告・コメントをふまえて、「戦争と戦争批判のダイナミズム」、「一次大戦と二次大戦の差」、「兵士と一般社会との重なり合い」、「アメリカの戦争観」などについて、活発な討論がなされた。

多数の出席者による、意義のあるシンポジウムであったと思われる。筆者は、それぞれの報告・コメント・発言から多くの知見を得るとともに、「冷戦（社会主義国）をどうとらえるか」、「被害者意識から、どのように積極的な反戦意識が導き出されるか」などといった、課題意識をもたせていただいた。

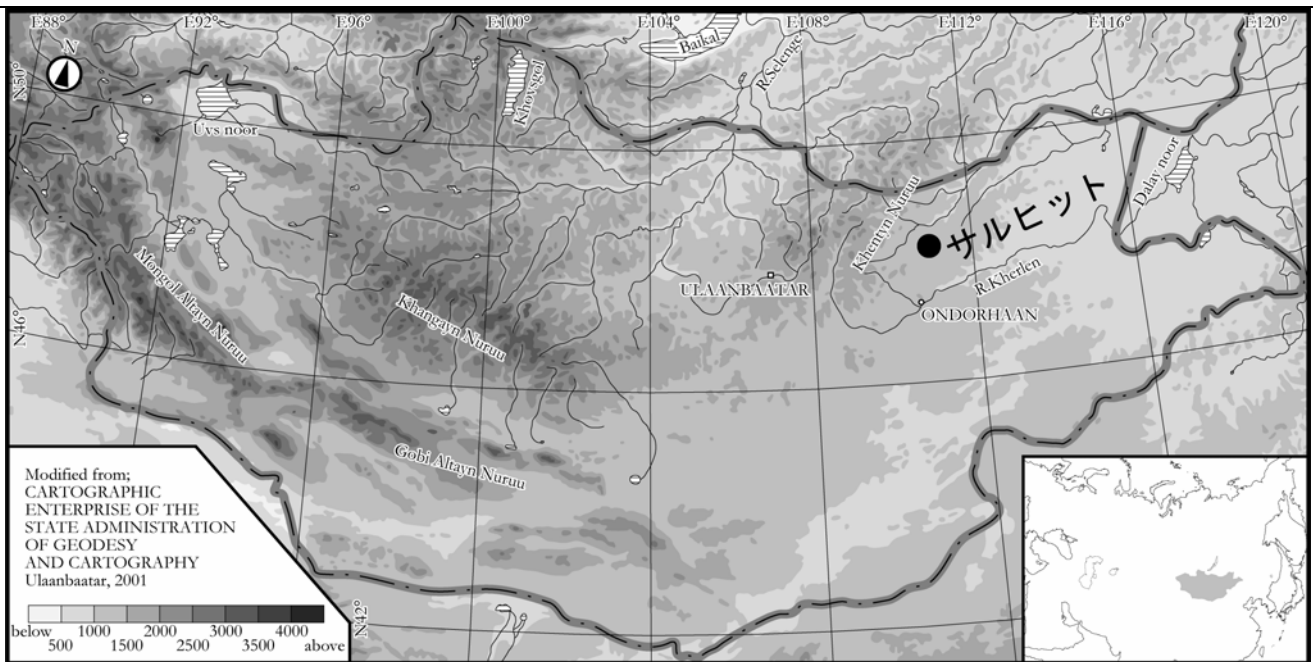
【歴史随想】

モンゴル・サルヒット野外調査記（その2）

出穂雅実（首都大学東京，ユーラシア上部旧石器時代）

2006年11月に発見された、モンゴル・サルヒット人類化石の重大性に鑑み、モンゴル科学アカデミー考古学研究所(以下、IAMASと略す)のツェヴェーンドルジ所長は、アメリカ、ロシア、ヨーロッパ諸国、そして日本の研究者にすぐさま連絡を取り、共同研究の可能性を模索した。当初、ツェヴェーンドルジ所長の考えでは、モンゴルと各国の研究者からなる国際調査隊を組織し、調査を長期的に継続することを望んだ(バトムフ・ツォグトバートル副所長からの私信による)。それは、モンゴルの人類学・考古学研究にとって歴史的な1ページになるだろう調査をつうじて、モンゴル国内の人類学・考古学の発展と国際的関係の構築、そして将来の研究をゆくゆくは担ってゆくであろう若手研究者の養成にとって絶好の機会になると考えたからである。

しかし、研究の世界はそのような目的の下にだけあるのではない。激しい成果争いとしての側面がある。予想どおり、各国の研究者が競って自国だけの調査の可能性を模索し始めた。また一方で、良い悪いは別として、予想どおり、日本はこの流れに乗り遅れた。日本の研究者を取り巻く、せちがらい国内研究環境では、研究者の機動力が世界に比べて著しく低下し、このような競争でしのぎを削ることが難しいのである。各国の争奪戦はすさまじく、その詳細はまだ生々しいので書けないが、私の知る限りにおいては、おおよそ以下のような流れをたどった。



第1図 サルヒット人類化石発見地点の位置。ロシア・ザバイカル地方の国境までわずか百数十キロメートルの地点にある。周辺の景観は広大なステップである。

まず真っ先に動き始めたのはアメリカ・スミソニアン博物館のチームである。しかし、彼らは研究成果のプライオリティーに関してモンゴル側と折り合いがつかず、共同調査を断念した。

その後、スミソニアンとほぼ同時に共同調査を模索していた、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所(ノヴォシビルスク、以下 IAERAS と略す)のチームが調査の実現に漕ぎ着けた。IAERAS のチームは IAMAS と長く共同調査を実施してきた経験があり、調整はスムーズに進んだ。

2007年6月、ロシア科学アカデミー人文科学部門長の A.P.デレヴィヤンコ学士院会員が指揮する IAERAS チームが試掘調査を実施した。しかし、数週間の試掘調査の後、彼らはこのプロジェクトから撤退した。発掘調査隊メンバーである IAERAS のエフゲニー・ルイービン博士の私信によれば、調査隊は彼らの試掘調査結果に基づき、次のようなシナリオを考えたという。まず化石が採集された地点周辺には、古い人類化石(彼らはこれを原人化石であると考えた)が包含されるような、数十万年前に遡る古い時代の地層がない。従って、この人類化石は当初考えていたような原人化石ではなく、きわめて新しい時代の奇形ではないかというのである。6月に強行された試掘調査は、彼らにとって残念な結論を導いた。また風速 20m/s を超える猛烈な強風と氷点下の寒さの中でおこなわれたこともあり、隊員の全員が彼地には二度と行きたくないと口をそろえた。ロシア隊の撤退によって、サルヒットの調査は振り出しに戻ったかに見えた。



写真1 ロシア製ブルゴン。

見かけは冴えないが、ダートを得意とするロシア製の名車。頻繁に故障するが、構造が単純なため運転手が簡単に修理可能。ロシアでは現在もこのタイプの新車が生産・販売されている。

IAERAS 隊による調査後まもなく、2007年8月、ドイツがモンゴルに国立考古学研究所ウランバートル支部を設置したことを記念して、大規模な国際シンポジウム『モンゴルの考古学研究の最前線』が開催された。2005年から細々とモンゴル東部で調査を実施していた私は、ドイツからの招聘を受けてこのシンポジウムに参加した。私はモンゴル東部で発掘調査したハンザット上部旧石器時代遺跡の地考古学的研究の成果について発表した(Izuho et al., 2010)。モンゴルの旧石器時代遺跡の多くが地表もしくは地表下浅

部からみつかるため、これまで遺跡形成過程がほとんど研究されてこなかったが、私は遺跡周辺の地形と堆積物の詳細な調査と分析をおこない、遺跡形成過程を復元した。

発表後、シンポジウム・オーガナイザーの一人である、パリ第1大学のイヴ・コパンス名誉教授(形質人類学)らが私の発表に興味を持ち、声をかけてくれた。通常は極めて困難な半乾燥地域の遺跡形成過程が詳細に復元されたことに驚いていた。彼は、「今日これから IAMAS のツェヴェーンドルジ所長と共に化石発見地点に赴き、現地を自分の目で確かめ、発掘調査の可能性について検討したいと思っている。3日後に戻ってくるから、もう一度会いましょう。もし将来、フランス隊が発掘調査をするときは、第四紀地形発達史と考古学の担当でチームに加わってほしい」と言ってくれた。私はもちろん喜んで参加させて欲しい旨を伝え、このシンポジウムの終了後、コパンス教授が現地から戻る翌日から、運転手付きのジープ1台をチャーターして、2日間の強行軍で現地に行く計画を独自に持っていたので、コパンス教授が戻ってきた日、つまり私が出発する前日の再会を約束した。

3日後、8月20日の午後、シンポジウム会場に疲れ果てたがうれしそうな顔をしたコパンス教授が現れた。彼らは途中、道を見失って半日迷ったが、何とか出発の翌日、現地にたどり着き、短い時間ではあったが現地を詳細に観察し、発掘調査をすることを決めたと伝えてくれた。彼は手のひらに載せた10個くらいの石を私に見せた。発見地点付近の地表で採集したが、石器かどうか確かめてほしいといった。残念ながらそれらは自然に破碎した岩石で、確実に石器ではなかった。そのことを伝えると少しがっかりしていたが、人類化石発見地点周辺の地形・地質の記載と、周辺に遺跡がないかどうかみてほしいと私に言った。私には1日しか現地に滞在できる時間はなかったが、できる限り現地の状況を記載し、帰国後にメールすると約束してシンポジウム会場を離れた。コパンス教授は翌日ソウル経由でフランスに帰国した。

8月21日朝7時、ロシア製のジープ「ブルゴン」で現地に向けて出発した(写真1)。メンバーは、モンゴル人運転手、IAMASの若手研究者トクソー・アムガラントゴス研究員、そして私の3名であった。現地までの距離はおよそ600km、そのうちの半分以上の行程がダートである。アムガラントゴス研究員は、最初の発見時の試掘調査に同行しており、ツェヴェーンドルジ所長の他に現地を知る唯一の研究員である。ウランバートルからヘンティー県の県都オンドルハーン市までの約360kmの間に途中2回ほどタイヤがパンクしたが、旅はおおよそ順調に進んだ。ここから先は、1/20万地形図、GPSデータ、そして牧民からの聞き取りを頼りに進まなければならない(写真2)。まずは発見地点に一番近い集落、バットノロブ村を目指した。オンドルハーン市からバットノロブ村までの間にはA19号線という国道が延びているが、数日前の大雨によって道路状況が劣悪なため、ほとんどの地点で迂回しなければならなかった。たまに見かけるゲル(ユルト)があれば牧民を尋ね、どのルートが通行可能か教えてもらった。わかりやすい迂回路がある場合は良いが、我々はしばしば道を見失い、時間を浪費した。悪路のために体はすでにガタガタだった。



写真2 ヒツジをバイクで運ぶ牧民。

なぜか両足をヒモで縛ったヒツジをバイクで運ぶ牧民が通りかかったので、道を尋ねる。



写真3 カフェ「サルヒット」。

ようやくバットノロブ村に到着し、目的地と同じ名前のカフェを見つけて喜ぶ。ロシアとモンゴルの「カフェ」は、日本の喫茶店というよりもレストランや食堂に近い。

出発からおよそ 11 時間が経過した夕方 18 時前、バットノロブ村にようやくたどり着いた。時折、馬に乗った若者が通り過ぎる他に動くものはなく、村は静まりかえっていた。この村からサルヒットまではさらに直線距離で約 70km あるが、ここが最後の村なので、村に数件ある小さな食料品店に入り、サラミ、チーズ、そして黒パン(それとヴォトカ)を買い込み、ついでにサルヒットまでのルートを尋ね歩いた。このとき、幸運にも村に唯一の食堂を見つけたので、最後の暖かい夕食を 3 人で楽しんだ。驚いたことに、この食堂の名前は「サルヒット」だった(写真 3)。

バットノロブ村から先は国道を離れ、GPS を頼りに北東に進んだ。直線距離で 70km という、平均時速 60km で運転すれば 1 時間そこそこで到着可能な距離であるが、たとえ道があっても激

しい凹凸のために 30km/h くらいしかだせず、またかなりの部分は草原の道なき道を進まなければならない。我々は幾度となく渡れない谷に行き当たって引き返し、登れない岩場に立ち往生し、そして迂回した。

モンゴルの夏は日本よりも日が長く、日没は 21 時近い。しかし私たちは 20 時半を過ぎてもまだ道半ばで、いよいよ日没が近づいてきたため、今日中の到着を断念し野営することにした。これ以上先を急ぐことも可能ではあったが、サルヒット周辺は砂金の盗掘集団が頻出するためそこで野営をするのは危険と判断した。

日中 40 近くに達していた気温はすでにぐんぐんと下がりはじめ、すでに 10 前半を指していた。急いでジャンパーを着込んで一人用のテントを設営し、ブッテルプロドと呼ばれる、黒パンにサラミとチーズをのせたロシア風のオープンサンドをヴォトカで流し込み、早々に寝袋に潜り込んだ。

翌朝 6 時半頃、テントがヤギに取り囲まれた騒々しさで目が覚めた。すでに日が昇りはじめていた。今日も快晴で、気温は 3 だった。ブッテルプロドを頼張り、テントを素早くたたんで 7 時半頃に目的地に向かって出発した。残りは 30km 程度のはずである。

目的地までのドライブは極めて順調だった。昨夜まで我々の行く手を阻んでいたような山地帯はすでに越えており、1 時間ほど緩やかな低地を走っていると、「あの丘の向こうがサルヒットです」とアムガラントゴス研究員が教えてくれた。特に大きな時間のロスもなく、広大な平野の中で目的地が眼前に迫っていた。鉱山のトラックが頻繁に走るためか、草原に深く彫り込まれた轍跡が鉱山



写真 4 第 2 日目の朝。

「ベリッ、ベリッ」。ヤギとヒツジが私のテントの周りで草を食む音で目覚める。



写真 5 サルヒット人類化石発見地点遠景。

サルヒット人類化石発見地点を北に望む。この道路の先に見える丘陵の谷間から人類化石は発見された。

に続いていて、足かけ 25 時間半でようやく目的地に到着した。

(つづく)

引用文献は最終回に一括して掲載します。

【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。以下の投稿規定をご参考ください。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回 12 月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年 8 月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
 - 論文(図表を含み、24,000 字以内; 英文の場合は、8,000 語以内)
 - 研究ノート・史料紹介(同 12,000 字以内; 英文の場合は 4,000 語以内)
 - 学界動向(8,000 字以内; 英文の場合は 2,700 語以内)
 - 時評・提言(4,000 字以内)
- (5) 論文、研究ノート(縦書き、横書きいずれも可)には、欧文で要旨(300 語以内)を添付する(原文が英文の場合は日本語要旨 800 字以内)。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿(表、図表を含む)3 部、フロッピーディスク及び別記送り状*(1 部)を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り 50 部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢 1 - 1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース(歴史・考古学分野)、河原 研究室気付 『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119 (河原研究室) Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp (河原温研究室内)

SNC47077@nifty.com (河原温)

送り状は学会ホームページ(<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>)からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にお問い合わせください。

メトロポリタン史学会(会長 佐々木隆爾)

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1 - 1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

: 0426-77-2110 (木村誠研究室) E-mail: mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会